

負けん気が強く、口も悪い。酒グセは勿論、女性遍歴も多い。そんないわゆるバカっぽい人間が新選組にいました。彼の名は、原田左之助。皆さんはどう思いますか？ボクは嫌いではないです。人間臭さとともに、現場の泥臭さがある。そして周りを納得させる実力があるから存在感がある。今回ご紹介する、新選組十番組長、原田左之助は腕の良さを近藤に認められた人物で、芹澤鴨肅清、池田屋事件、油小路事件といった組が京で地位を占める時に存在感を示した、いわば懐刀のような腕の持ち主。また、史実ではないと思いますが坂本龍馬暗殺の容疑者としても知られています。

原田左之助は天保11(1840)年、伊予国(現愛媛県)の松山生まれです。中間(ちゅうげん)という藩中最下級、藩士の奉公人の家に生まれました。非常に負けん気の強い人物像だったらしく、新選組の古典、子母澤寛『新選組物語』によると松山で、格上の人間と争いがあった際「腹切る作法も知らぬ下司(ゲス)下郎(ゲロウ)」と罵られたことから、意地になって腹を切ったことが書かれています。酒に酔うと腹の傷跡を見せ「俺の腹は金物の味を知ってるんだぜ」と啜りをきったそうです。また、かなりの美男子だったらしく家格の高い女性に誘われ、不義密通を働くなど、伝えられる豪胆な話は枚挙に暇なく、人間的魅力に満ちています。その後、彼は脱藩し江戸へ。天然理心流剣術、武術館に出入りし、近藤らとともに上京、そして新選組を結成します。その後、鳥羽伏見戦争を経て、江戸へ。甲州勝沼での敗戦を契機に、近藤と不仲になります。負けが込んできたことから苛立つ。良くあることですが、現状批判では収まらなかった彼は永倉新八らと共に離脱し靖共隊を結成。しかしここでも決別し、上野彰義隊へ参加。靖共隊は旧幕軍指揮下に入り鴻之台(現千葉県市川市)に向かいます。ここには既に決別した土方が上官として位置しており、これに屈辱を感じたのではないかと推測があります。また、靖共隊隊長、芳賀宜道(はがぎどう)は永倉の旧友、そのよしみで同じ副長格でも永倉を重用したことに腹を立てたという説もあります。どちらにせよ、左之助の基本性質、“負けん気”からの行動だと想像できます。

現在、台東区上野公園は動物園、博物館、美術館があり、また桜の名所でもあり、非常に穏やかな空気が流れています。ボクが訪れた時も沢山の人がいて、まったり遊んでいましたが、140年前は現在と180度違う空気が流れていたんだと思うと正直、妙な寂しさを感じました。上野寛永寺は徳川の菩提寺で、大坂から江戸に戻った徳川慶喜はここで謹慎。慶喜警護のため、旧幕臣を中心に結成された彰義隊が屯集し、最大時約4000名に膨れ上がります。やがて慶喜は上野から水戸へと謹慎の場所が移されますが、彰義隊は籠城し新政府軍打倒のため、にわかに殺気立ちます。そんな江戸市中で一番徳川の象徴的な場所、上野。ここでの討ち死に覚悟の戦争を決意した彼等に、左之助は組した。長州藩、大村益次郎は新式装備で殲滅を主張しました。慶応4(1868)年5月15日、午前7時、新政府軍からの仕掛けで戦闘は始まり、同日午後5時頃には彰義隊をほぼ全滅させることに成功。新政府軍の破竹の勢いは留まることを知りませんでした。左之助は15日の戦闘の際に被弾した銃創が原因で17日、死んだと言われています。

上野の西郷隆盛像の後方には木が並んでいます。皆さんはその木陰に隠されたスポットに彰義隊の墓があるのをご存知でしょうか。西郷はガイジンも面白くなって写真バシバシ。彰義隊は日本人でも素通り、素無視、というか存在すら知らない。ボクが感じた妙な寂しさはここにあります。怒りを抑えてから、心を澄まし拝ませてくださいました。皆さんも訪れる際はきちんと拝んで下さい。また、荒川区南千住円通寺には寛永寺黒門の一部(表紙写真参照)が移築され立っています。目を凝らさずとも、はっきりと分かる無数の弾痕に、見る人の心は奪われる。咲き誇る桜が吹く風によって散るように、一瞬にして散っていった原田左之助と彰義隊。彼等の強烈な生き様には感動が確かに存在する。たまには泥臭い風も感じたいものです。誠

「Love Saves The Day の巻」

こないだ調べものをしておりまして、探していたものとは別にひょっこりある本が出版されていたということを知りましたので本屋に行き購入し、つい先だって読了したのでその本のこともご紹介してみようかと思います。

さて、その本、書名を『ラブ・セイブス・ザ・デイ——究極のDJ/クラブ・カルチャー史』といいまして、著者はティム・ローレンスというイギリスの人。ちなみに原著は*love saves the day: a history of american dance music culture, 1970-1979*、というものです。副題からもわかるとおり、この本はディスコの歴史を数多の関係者にインタビューして聞き取り、1970年代のNYのディスコの歴史の奥深くに分け入るという内容でして、1970年代に始まるディスコが、一方ではthe LOFTのようなアンダーグラウンドなコミュニティとして流れを作ると同時に、他方では「ディスコは金になる」と集まり出す人たちの先導によって一大ブームとなっていく様子を描きます。ディスコにまつわる明暗・光と闇をアンダーグラウンド/コマーシャルを行き来しながら紐解いており、トリビアルな知見も盛りだくさんです。

ちなみに書名のlove saves the dayは1970年のバレンタインデーにthe LOFTのデヴィッド・マンキューソがパーティを始めるにあたって送った招待状に書かれていたメッセージからとられていたものですが、この本を読んで印象深く感じたのはそのデヴィッド・マンキューソという人のスタンスです。コマーシャルなこととは関わろうとせず、しかしDJの地位向上には率先して取り組み、他のDJたちにも大きな影響を与えていく様は本書によって始めて知るところ大でした。もちろん数多くの証言のなかには彼に否定的な語りもたくさんありますが。

ディスコに興味があるひとなら、その歴史を知るための恰好の一冊になるでしょう。あと、NYにおけるディスコの盛衰はやっぱり街の歴史と重ね合わせて考えるのも大事だろうなと思いましたので、そういう本をご存知の方はぜひおしえてください。ついでに、本書とは関係ありませんが『ALL ABOUT DISCO MUSIC』というディスクガイド本が出ているので、これもちらっと眺めるといいかと思います。

というわけで毎度おなじみのこの駄文、今回はうす〜い紹介でたいへん恐縮ですが、この辺りで筆をおかせてもらいます。悪しからず。てなことで、たまにはみなさんも「読書の秋」してみましょ。

## information

今回のcollectiveでめでたく4周年を迎えることになりました。これもひとえに皆様のおかげです。今後も共にcollectiveを「あったかい場」に育てていきましょう！  
さて、次回のcollectiveですが、晩秋を予定しています。季節にぴったりの音で皆様の参加をお待ちしています。

[http://www.geocities.jp/collective\\_web/](http://www.geocities.jp/collective_web/)



4th

anniversary issue

press collective

## さよなら市民球場 広島カーブ観戦記 “tawaki”

tawakiといえば皆さんご存知、大の広島カーブ狂。僕以外のcollectiveのメンバーもインドア風な顔をして、みんな意外と野球好きなんです。楠田君と浦井さんは阪神ファン、稲垣君は珍しくマリナーズファン。なかなかバリエーションに富んでいます。オーガナイザーの松井君は残念なことにプロ野球には関心がないようです。悪しからず・・・ちなみに浦井さんの部屋にはたくさん阪神グッズが転がっていて、あのクールな印象を裏切ってくれます。つい先日遊びに行った稲垣君の部屋にはマリナーズのフラッグがぼつちり飾られていました。大量のレコードと野球グッズ。これがcollectiveの基本形であります。

ちなみに僕は広島とは縁もゆかりもない奈良県民として20数年を生きてきたので、カーブ凶を自称しながらも、今まで本拠地である広島市民球場で試合を見た経験がなかったのです。このことがずっと「しこり」として残り続けていたのですが、今シーズンをもって広島市民球場の閉鎖が決まり、「お別れ」も秒読み段階になった2008年夏、遂に僕のハートに火が付きましました。そう。遠路はるばる新幹線に乗って、広島に行ってきたのです。

広島駅に到着。当然、そこはカーブのお膝元。お土産屋さんやコンビニにカーブグッズがでんご盛り。スポーツ新聞もカーブの選手が一面をデカデカと飾っているわけです。その日の一面は横山竜士投手の一軍復帰記事でした。これを読んでいる皆さんの多くは横山と聞いてもピンと来ないのではないのでしょうか。「カーブで知っている選手を挙げてみる」と問われれば、多くの人が山本浩二、鉄人・衣笠祥雄を挙げるとします。そして次に来るのが、北別府学、大野豊、川口和久、脳腫瘍で夭折したツネゴンこと津田恒実。カーブの投手王国を築いたLegendたちですね。そして最近では2000本安打を達成した野村謙二郎、そして前田智徳。この辺までは多少プロ野球をかじったことがある人ならわかると思います。でも、横山って誰？って感じでしよう。そんな知名度の低い選手が一面を飾ってしまうローカリティに大興奮。と同時に、なぜもっと早く広島に足を踏み入れなかったのかと後悔の念をいだきました。勉強をもう少しがんばって広島大学に行っていれば・・・おたくノースに就職してはいらば・・・そんな妄想が膨らむほどに広島はカーブ色に染まりきった街でした。

さて、念願の広島市民球場ですが、スタンドはやはり赤一色。緑の天然芝とのコントラストが何とも美しいものでした。僕は普段、甲子園球場で広島戦を観戦するのですが、甲子園だとカーブファンは来場者の5パーセント程度。何とも肩身の狭い思いを強いられてきました。阪神のことを心のなかでは小バカにしつつも、そのような態度を示すとシバかれかねない緊張感に耐えてきました。それに比べると、広島市民球場は、カーブファンにとって聖地というか天国というか、筆舌に尽くしがたい居心地の良さがあるのです。僕が見に行った試合は0-4でカーブがスワローズに惨敗したのですが、そんな結果とは裏腹に充実感を得て帰ることができたのです。これは何を隠そうマジョリティでいることの居心地の良さであります。少し危うさを感じないわけではないのですが、たま～にこういった雰囲気味わうのも悪くはないものです。でも、よく考えてみると、僕が広島に生まれ育っていたら、今ほど熱烈なカーブファンじゃなかったかもしれません。広島にカーブファンがいるのは当たり前で、そこでは猫も杓子もカーブファン。自分の選択の余地がないほどに所与のものとして受容している存在なのです。でも、広島から遠く離れたところでカーブを応援している人たちは半端じゃない気概もっています。僕はそういうマイノリティの強い思いにリアリティを感じます。

ホームである広島に行って始めて気付いたこと。それはアウェイにはアウェイの良さがあるということ。アウェイではマイノリティであるがゆえに背筋が伸び、目に見えない大切な何かを背負っているという独特の矜持が芽生えます。ホーム特有の「ぬくい」同胞感覚も悪くないですが、ファンを自称するならば、ここは敢えてアウェイという逆境を楽しんでみるのも乙なものです。

## recommend music for relaxation “tawaki”

collectiveは一応はダンスミュージックのパーティですが、ダンスミュージックに拘泥しすぎないというところが、collectiveの面白い立ち居地だと思っています。おそらくここに足を運ぶ皆さんも、ダンスミュージックに親しみつつも、様々な音楽にアンテナを張り巡らしているのではないかと想像しています。てなわけで、今回はtawakiが最近愛聴しているリラクゼーションにぴったりな名盤を紹介。URLを貼り付けておくので、家に帰ってからチェックしていただくと幸いです。

### ① アン・サリー / こころうた

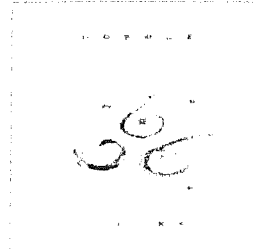
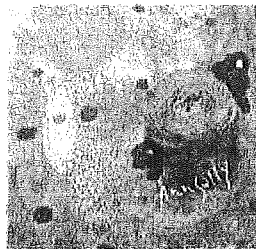
在日韓国人のアン・サリーさんの5thアルバム。1stから3rdまではsoul bossa trioのゴンザレス鈴木氏のプロデュースのもと、洒落なジャズ・ボサ系の音楽を演じていたアン・サリー。既にこの時点で確固たる地位を築いていたのですが、4thアルバムでは一転、ニューオリンズのジャズメンたちと作った渋いボーカル・ジャズで従来からの路線転換を伺わせました。そしてセルフプロデュースの最新作である5th『こころうた』ですが、ここでも既出のアルバムとは異なる表情を見せてくれています。というより、完全にネクストレベルに行っちゃってます。これまでのアルバムに比べオリジナル曲がぐっと増えた分、所要所のカバー曲が映えます。出色はアルバムのラストを飾るミルトン・ナシメントのtravessiaのカバー。アン・サリーのボーカルは神々しいミルトンの楽曲を見事に歌いこなしており、原曲以上の輝きを放っています。アルバムを聴き終えた後には何とも言えない幸福感に包まれます。

<http://www.annsally.org/>

### ② えま&慧奏 / いのちのしま

おそらくcollectiveのお客さんで、えま&慧奏(えそう)を知っている人はほとんどいないのではないかと思います。すこぶる良いアーティストなので紹介します。えま&慧奏は淡路島に住む男女二人組みのユニットで、一般にはニューエイジ系にカテゴライズされています。ニューエイジ系と聞けば、とたんに胡散臭い民族音楽とデジタル音楽の融合みたいなものを想起しがちですが、えま&慧奏は似て非なる存在。彼らの楽曲は主としてボーカル、シンセ、二胡、打楽器で構成されているのですが、それぞれクオリティが高く、すべての要素が真事に溶け合って、壮大な音宇宙となっています。とりわけ「レインボー・ボイス」と称される、えまの包容力のある歌声が素晴らしいです。ジャンルこそ違いますが、僕はえま&慧奏に70年代アメリカのスピリチュアル・ジャズなんかに近いパッションを感じます。とりわけ最新作の『いのちのしま』はボーカル作品が多く、従来の作品群よりかなりポップな印象なので初めて聴くリスナーにオススメです。大型レコード店やamazon等の流通経路を使わず、地道に自身のウェブサイトや彼らに深い店舗のみで販売するというスタンスに好感がもてます。自宅であつたりする時にピッタリな音源です。

<http://www.yurai-works.com/>



## 飛鳥旅行記 “hiyoco”

奈良で育ち、奈良で働き、奈良に住み・・・

こんなに奈良を愛しているというのに、結構、灯台下暗し状態な私。これじゃあ、いかん！ということで、「日本の心の故郷」とも言われる明日香へ、1泊2日旅してきました。近鉄電車で揺られ、1時間程で飛鳥駅に到着！「明日香」と「飛鳥」どう違うかという、「明日香」は、明日香村を指す言葉であり、「飛鳥」は、明日香村を中心に橿原市や桜井市など周辺の地域を含めた総称らしいです。さっそく駅前でレンタサイクルをして、明日香を散策。小学校の遠足で来た時とは、色々変わっていました。大きいと思ってた亀石が、意外に小さかったり、タダで見れた石舞台古墳が、有料になってたり・・・でも歳を重ねてから、記憶を辿るというのも面白いです。緑と空の青、追いかけくる雲に癒されながら、暑い中でこくチャリで良い汗をかきました。

そして今日のお宿、民宿若葉さんへ。

[http://www.geocities.jp/wakaba\\_asuka/](http://www.geocities.jp/wakaba_asuka/)

岡寺のふもとにある、このお宿。ガラガラッと年季の入った戸を開けると、愛想の良いご夫婦が迎えてくれます。ここで、飛鳥鍋との出会いがあったのです。飛鳥鍋は、奈良県・明日香村の郷土料理で、牛乳をふんだんに使った出し汁で鶏肉、季節の野菜、うどんなどを煮込んだ鍋料理です。飛鳥鍋の由来は、「唐の使いが伝えた」とか、「お坊さんが考えた」など、いくつかの説があるようですが、今から1300年ほど前に、飛鳥の都で食べられていた“牛乳で鶏肉を炊いて食べる料理”をルーツに出来上がったようです。「鍋に牛乳?!」と思われるかもしれませんが、これがもう癖になる美味しさ！独特の牛乳臭さもなく、あっさりしているけどコクがあって、牛乳嫌いな人でも食べられちゃいます。この鍋を目当てに、お客さんがやってくるのも頷けます。この宿の主人いわく、「白味噌がミソらしい。(このギャグなかなか気づかず)NHKで飛鳥鍋を宣伝してから、夏でもお鍋を出すようになったそう。お汁にしょうがを混ぜて食べるのが、通のおべ方。地鶏も野菜もバクバク食べて、アはご飯と卵でお雑炊。この雑炊がまた格別！この卵、この宿で育てられた鳥骨鶏の卵で、それはもう濃厚&まろやかで、美味しさに感動しながら心もお腹も満たされました。この飛鳥鍋のレシピ入手しちゃったので、おうちで是非やってみてください。鶏がらスープ400cc、牛乳1000cc、白味噌れんげー盛り、塩みりん少々。具は鶏肉、野菜など、お好みでどうぞ！

そんな食との出会いもあり、明日香にはまってしまった私。翌日も明日香を、歩いて散策することに。そこで、田畑の中にぼつんと1軒のお寺を発見！これがなんと、日本最古のお寺、飛鳥寺だったのです。それだけでなく、ご本尊である飛鳥大仏も日本最古の大仏様だと申すのです。この大仏、東大寺や鎌倉の大仏のように巨大ではなく、小さな堂内にすっぽりおさまる大きさ。仏像との距離も近く、本当に手を伸ばせば触れられそうな距離でじっくりと観賞できます。私には少し微笑んでよう見えました。

そしてそこから、少し歩いたところに、かなりの珍スポットも発見。飛鳥坐神社というところで、性信仰で非常に有名な神社らしいです。西日本3奇祭の1つ「おんだ祭」が、毎年2月の第1日曜日に開催されています。その祭りが面白くて、男女和合を象徴化した祭りで、なんと天狗とおかめのベッドシーンが演じられるそうです。女子なので深くは書けませんが機会があれば是非見に行ってみてほしいものです。

いやいや、ほんと、奈良でも十分遊べるなあ、楽しいなあと感じた明日香旅。奈良をもっと好きになりました！大阪からちょっと足を伸ばして、是非行ってみてください。そして、チャリで散策して、飛鳥鍋を食べて、日本の心の故郷を感じるのも良いんじゃないでしょうか。